

名建築の危機 リノベーションのススメ

蓄積が生む未来

宮崎県に都城市民会館といふ建物がある。老朽化したため、市議会は9月、解体の予算を可決した。

これは巨大なアルマジロの怪獣のような独特の造形をもつ建築である。1960年代に菊竹清訓が設計したものだ。明治以降、欧米の流行を模倣し、追いかけてきた日本の建築界が、気がつくとき、世



五十嵐 太郎 東北大准教授、建築評論家



67年パリ市生まれ。東京大学大学院工学系研究科修了。中部大助教授を経て現職。著書に「戦争と建築」（晶文社）、「過防備都市」（中公新書ラクレ）「美しい都市・醜い都市」（同）など。

界のトップランナーに躍りだした時代の傑作である。がむしやらな高度経済成長期だからこそ、実現できた大胆なデザイン。世界でただひとつのオンリーワンの建築である。これを失えば、都城は日本のどこにもある地方の街と同じ風景になってしまう。それが壊される寸前まできていた。

たとえ廃虚でも

大型の再開発が続く東京とは違い、都城ではただ解体して、更地にするだけだった。市は残す意志がなかったし、宮崎県のセールスマンである東国原知事も、都城が彼の故郷であるにもかかわらず、保存に向けて動かなかつた。筆者は、結婚式の教会に転用するなど、ほかに使い道はないのかと想像していた。いや、当面は廃虚としてでもいいから残って欲しいと思っていた。長く放置されていた駅舎をリノベーションしたパリのオルセー美術館のように、寝かせておくと価値が生まれ、いずれうまく活用法が見える。だからこそ、名建築の危機を救った南九州大学の叡智は、称賛に値する。

だが、現在も東京中央郵便局、中銀カプセルタワー（東京）、キリンプラザ大阪など、存続が危ぶまれている建築はあちこちにある。特に民間のものは状況が厳しい。

中銀カプセルタワーは、先

日亡くなった黒川紀章の代表作であり、海外からの建築家が必ず訪れる場所だ。またメタボリズム（新陳代謝）の思想を表現したものが、これは今でも日本発のもっとも有名な建築運動である。

高松伸の設計したキリンプラザ大阪は、パブルの日本だからこそ登場した現代建築だ。それぞれの時代に最先端の努力をした建築は、もっとリスペクトされるべきではないだろうか。

傑作は、建築家の軌跡と仕事の条件と社会の背景がうまく交差して、初めて成立する奇跡である。同じ建築家であっても、簡単に繰り返せるものではない。以前よりも確実にすぐれた建築ができるというのなら、またいい。しかし、ほとんどの場合は、経済原理を優先した凡庸なビルに変わっていく。短期的に考えれば、こうした建築を残すメリットは少ないだろう。

しかし、長期的な経済効果

を想定すれば、国際的に評価されるユニークな個性をもつ現代建築は大きな価値をもつのではないか。

ところで、シドニーのオペラハウスは、おそらく20世紀後半に誕生したもっとも有名な人工的な景観である。実はデザインの実現が難しいことや、総工費が大幅に膨らむなどのトラブルにより、問題とされたプロジェクトだった。では、ただの安いハコとしてつくれば良かったのか？

ヨットの帆のようなかたちと並ぶシルエットは、今やオーストラリアの観光イメージにもなっている。現代建築ながら、すでに世界遺産にも指定された。どんな広告会社に依頼しても、これを超える恒久的な宣伝価値を生み出すことは不可能だろう。後に設計者のジョン・ウツォンはオーストラリアから表彰されているが、高い買い物に思える建築にはこうした力がある。

美しい景観をつくるため

に、東京・日本橋の上の首都高速を解体すべきだ、あるいは電柱を撤去して地中化するべきだ、といった意見が叫ばれている。いずれにも共通するのは、新しい工事を誘発することだ。しかし、そんなお金があるなら、いま存在している貴重な建築を残すことにまず使うべきではないのか。

街の看板をなくすべきだという意見もある。仮に日本全国の電柱や看板が消えたとしても、やはりそこにあるのは同じようなビルが並ぶ風景ではない。

日本では、いつも見えない震災が起きている。実際に地震が発生しなくても、どんどんスクラップ・アンド・ビルドが進み、30年たてば、ほとんどの建築が入れ替わる。だが、見えない震災に抗して、街にキャラを与える建築を蓄積することは、重層的な時間を風景に刻み、未来の都市景観を豊かなものにするだろう。